九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世辞書『俚言集覧』にみえる〈障害〉表現 : 類型・認識の析出

高野, 信治
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1960020

出版情報：九州文化史研究所紀要. 60, pp.55-88, 2017-03-31. Manuscript Library, Historical Records Section, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

近世辞書『俚言集覧』にみえる〈障害〉表現

――類型・認識の析出――

高野信治

（a）目的と背景

本稿の目的は、近世日本の辞書のなかに表現される、いわゆる障害（者）に関わる言葉・ことわざを、不可分と想定される広い観点から採録し、前近代の障害認識の一端を探る前提作業とすることにある。なお、以下の理由から現代的な障害（者）観よりも広角に捕捉するため、それと区別される前近代の認識を想定する場合には〈障害〉と記す。

昨年（二〇一六年七月）の障害者施設元職員が重度障害を持つ多数の入居者を惨殺した事件[1]には社会的な反響があった。本事件について当該施設の設置者に当たる神奈川県は「この事件は、障がい者に対する偏見や差別的思考から引き起こされたと伝えられ、障がい者やそのご家族のみならず、多くの方々に、言いようもない衝撃と不安を与えました[2]」としている。本事件の被疑者の動機の全容について筆者は知り得ないが、その背景に「障がい者に対する偏見や差別的思考」と総括されるものがあるとの指摘は、この事件の被害者の匿名化そのものが物語っており、障害（者）に対する偏見や差別的思考は、障害を理由とする差別の解消を推進し合理的配慮の必要性がいわれる現

今[3]にあっても、未だ社会的な問題といえる。昨年の事件はけして特別ではなく、歴史的に形成された差別意識を内包する現代社会そのものが生み出した事象ではないだろうか。そうであれば、研究者とともに重度知的障害者の親でもある筆者の立場からみれば、社会に埋め込まれたかかる意識に対する歴史的考察は、ある意味で喫緊の課題のように思える。

人が集団生活を営み、その社会性の多様化にともなって特定の人や集団に対する偏見や差別の意識が複雑に形成されるとすれば、本稿で捉えたい障害（者）をめぐる事象もそのようなものの一つだろう。ただし、その歴史的な形成を見る場合、異民族差別、賤民差別、障害者差別などとステレオタイプないし一義的にみるのは妥当ではない。筆者は別稿[4]で、近世日本のアイデンティティと差別認識の連鎖について、道徳性を軸に、遊民、異民族、障害者・病者などを対象に考えたことがある。かかる問題意識をベースにして、本稿ではさらに障害者差別の客観視、人間とは何かという広角な人性における障害の捕捉、疾病や身体認識との関わりのなかでの障害の位置付け[5]、このような見方を加え、近世辞書にみえる障害関連文言を採録し、日本近世社会の〈障害〉認識に迫る基礎作業を試みたい。迂遠ながらも、差別事象を歴史的に直視することが、昨年のような悲惨な事件の根絶、社会に胚胎されたマイノリティへの特異な眼差しの解消に繋がると考える。

（b）類型と認識

障害の定義には様々な考え方があるが、本稿では身体障害、知的障害、精神障害の三類型をさしあたり想定する[6]。視覚・聴覚などの知覚・感覚機能を含め、様々な器官部位・臓器の機能不全に伴う疾患（内的障害）などは身体障害に含め、また自閉症・アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これ

に類する脳機能の障害、発達障害は精神障害の範疇とする。(7)

ただし、かかる障害分類はあくまで現代での便宜的性格を持つ。前近代で、このような障害認識が当然のものとして存在していたわけではないだろうし、またかかる現代的区分による弁別は史料的にも容易ではない。

そこで先述した諸観点も踏まえ、本稿で注目したいのは「あやし」という言葉である。対象にする近世辞書（『俚言集覧』）では、

怪も異も妖も奇も霊もあやし也、怪ハ変なること也、異ハ常とちかひたるを云、妖ハ人間なみでなきを云、奇ハめづらしき也、霊ハ生て働く様なことをいふ

と説明される。「あやし」は必ずしも人のみを想定した文言ではないが、「怪」「異」「奇」「霊」はそれぞれ、人にまつわる表現（怪人、異人、奇人、人霊）があり、「妖」は「人間なみでなき」（人並みではない）と直接に人を想定し説明される。「あやし」とは、それを対象化する者にとって、尋常ではなく特異な存在ないし現象、という程の意味であろう。このようにみれば、「あやし」とは当事者認識とともに他者による認識・感覚が強く反映された心性と考えられる。

辞書からの〈障害〉表現採録に当たっては、この「あやし」という心性が付随していると考えられる人の個性に関わる表現・言葉を広く収集した。したがって、現代的な障害観ではそれに該当しないようなものも、尋常では無く特異な存在ないし現象と認識されていた可能性に鑑み採録した。例えば「あかがしら」（赤い髪）は髪の形質であり個性的な身体特性だが、辞書掲載の意図には「あやし」との心性が付随していると想定し採録した。「人」の特性、すなわち人性から隔たった存在との思考がうかがわれ、それは、当時の日本（和・倭）観と表裏の関係にあったともいえる。「あかがしら」に「あやし」相当の認識があったとすれば、それは「異人」（異民族）観とも通底しよう。また、賤民の人々もあるべきと考えられていた人性から隔たる存在として特異な眼差しで捉えられ、それが

偏見や差別の土壌ともなったろうが、そのなかに障害者やそれにつらなる疾病者・疾患者が潜在するという見通し[8]も踏まえて採録する。

以上のような立場から、当時（日本近世）、尋常では無い特異な存在や現象としての「あやし」、換言すれば人性からの隔たりという心性を基準にして、広く障害を示す言葉を集める趣旨から、先述した現代的な障害類型をとるものの、近世辞書からの採録である点に留意し、類型を身体性、知性、精神性と表現した。また、「あやし」の心性が当事者というよりも他者との関係のなかで生まれる可能性を考慮し、認識という項目も加えた。これは、当事者ではなくむしろ周辺の他者、いわば社会的なマジョリティ（多数の他者）が、「あやし」の状態として如何に観察していたのか、を慮った立項である。ただし、辞書表現から推断が困難な場合は記していない。

（c）『俚言集覧』について

語彙採録対象は『俚言集覧』という辞書である。これは、石川雅望編『雅言集覧』、谷川士清編『和訓栞』とともに近世の代表的辞書とされる。「鄙俗ヲ先トシテ雅訓ヲ後トシ輓今ヲ主トシテ上古ヲ賓トセリ」[9]という編集方針で、語彙数においても同時代の辞書を圧倒する膨大なものと評される。つまり庶民層まで組み入れた多様な人々の語彙群に表象される心性を探れる可能性があろう。

寛政から弘化年間まで書き継がれたと推測される稿本は、未完のまま質入れなどで一部が失われたが、その大半は旧帝国図書館の所蔵となり、増補の上、活字本が刊行[10]された。ただし、書誌学研究が進むなかで、編纂者は村田了阿ではなく太田全斎（方）であるのが判明し、刈谷図書館「村上文庫」からは失われた稿本の一部を転写した『移山伊呂波集』が発見された。また活字本は稿本の五十音横列の特異な配列を通常の五十音順に改めたり、図像や一

部の項目（「剰記」）、書込部分などが削除された。さらに遺漏も判明している。このように活字本は様々な制約を持つ。ただし確認作業などに伴う利便さに鑑み、本稿においてはこの活字本を基本とし、[11] 稿本の佚失部分（伊部上巻）の転写本である『移山伊呂波集』を組み込み上梓された影印本[12]から、『移山伊呂波集』につき項目選択したものを加え作表、編集した。[13]

近世における卑近な俗語を含む語彙・ことわざ類のなかには、本来の人のあり方やそれから離れ外れたと認識される障害、疾病などに対する観念、意識が示される可能性が高いであろう。

（d）凡例

採録した語彙一覧の作表にあたっては以下の諸点に留意した。

i、語彙、ことわざの収載対象は『俚言集覧』（太田全斎編纂）とする。ただし、名著刊行会の活字本を利用する。これには稿本（元本）にはない追加事項（増補）がある。作表にあたってはこれも採録した。その大半は前近代のデータからである。なお近代初頭の表現と考えられるものもあるが、前代の言葉の範疇として採録した。

ii、『俚言集覧』稿本の佚失部分（伊部上巻）については、該当部分の一部転写と目される『移山伊呂波集』（ことわざ研究会監修『俚言集覧自筆稿本版』第四巻、クレス出版、一九九二年）から採録した。

iii、表の記載事項は、項目、説明文、類型、認識、出典とした。

iv、項目には採録の語彙・ことわざ類を歴史的仮名遣いに基づく五十音順で記す。ただし、『俚言集覧』で立項された語彙・ことわざ類のみならず、本文中にみえる語彙からも煩を厭わず記した。その際は、項目の欄に＊を付し、説明文の欄の冒頭に、「　」記載にて採録元に当たる語彙・ことわざを記した。本事項での〈　〉内には採録本で

のふりがな表現（辞書本文からの抜書もある）を示した。

v、説明文は、『俚言集覧』の本文表記（ただし抜粋、新字への変更、句点挿入などあり）を基本とし、作表者（高野）による評価は、類型と認識の事項に反映させた。

vi、説明文で、『俚言集覧』の本文表記以外は（　）で括った。これは『俚言集覧』に直接示されないふりがなや簡便な訳解、他書（本稿では『日本国語大辞典』〔小学館〕を基本にし、一部『古事類苑』を加えた）からの引用などである。なお、〔　〕は採録本（活字本・稿本）掲載の引用出典である。（　）内での『日本国語大辞典』『古事類苑』引用も辞典名に〔　〕を付し、「　」内はその項目名である。また、〈　〉は採録本にみえる表現、ふりがなからの記載で、同書の（　）表記は、上記した『俚言集覧』の本文表記以外は（　）で括るという原則との誤認回避のため、〈　〉表記とした。

vii、類型は、先述したように、現代的な定義の一つである身体障害、知的障害、精神障害および重複障害を想定するが、前近代の障害定義が現代的な基準と合致しない可能性が考えられ、かつ本稿ではかかる障害認識を広角に捕捉するため、身体性、知性、精神性と表現する。さらに、『俚言集覧』には障害の比喩的表現も記される。そのような性格を持つ類型は、比喩性と記す。類型の記載にあたっては、いわゆる重複障害も含めて可能な限り個別類型の複数書き入れを心掛ける。なお、賤民集団は病者・障害者を含むと想定されるとの立場から重複性とした場合がある。また比喩性と考えられる場合は、その比喩の所以となった類型を可能な限り併記する。

viii、認識は、先述した本稿の立場から、二つの基準を立てた。

第一に、「あやし」という感じ方を反映した人性認識としての

怪奇性、異常性、不完全性、超越性、人外性

である。本稿ではこれらについて次のように考える。怪奇性は他者に恐怖心を抱かせた可能性があるもの、異常

性は常態とは考えられないと認識された可能性があるもの、不完全性は人として心身などに欠損が認められると考えられた可能性があるもの、超越性は人として超越的な身体や知的能力などを持つ可能性があると認識されたもの、人外性は人とは考えられない特性を持つあるいは生物や事物などと相関を以て捉えられた可能性がある場合、をそれぞれ指す。

第二に、他者（マジョリティ）からみた関係認識としての

無益性、害悪性、忌避性、醜怪性、嫌悪性、非道性、侮蔑性、基準性、詐称性、遊興性、招福性、畏敬性

などを想定した。ここで考慮している特徴は、役に立たずという無益性、周囲や社会に害・厄介をなす害悪性、避けたいという忌避性、得たい不明のものに対する恐怖を伴う醜悪感である醜怪性、心的に受け入れがたい嫌悪性、人道を踏み外した非道性、高みの自身からの侮蔑性、自らの指標判断や戒めを与える基準性、〈障害〉を持つとの虚偽言動をなすと判断される詐称性、他者に文芸・芸能などを介し慰安を与える遊興性、他者に福をもたらす招福性、〈障害〉に伴う非凡さが畏れ敬う対象とされる畏敬性、このようなものである。

ただし、辞書の記述内容から、〈障害〉にまつわる人性や関係の認識について確固とした基準で析出するのは困難なため、全項目での書き入れにはならないのを断っておく。

ix、以上の類型、認識は、作表者（高野）による暫定的な評価、価値付けで、主観内在の恐れがある。このため、再考の機会を排除するものではない。

x、出典には書名略記、巻数、頁を記す。『増補俚言集覧』は俚諺、『俚言集覧自筆稿本版』は稿本、また上巻は上、四巻は四の如く、頁は算用数字で示す。

注

（1）「平成28年7月26日午前2時頃、指定管理施設である津久井やまゆり園において同園の元職員（略）が施設のガラスを割って侵入し、施設の利用者男女が刺され、男女19人が死亡、男女27人が負傷（うち3名は職員）」（「津久井やまゆり園において発生した事件について」〔平成28年10月12日「参考資料」。神奈川県保健福祉局福祉部障害福祉課「津久井やまゆり園で発生した事件について」〈http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f535096/〉所収）という事件。

（2）「ともに生きる社会かながわ憲章～この悲しみを力に、ともに生きる社会を実現します～」〔平成28年10月14日　神奈川県〕神奈川県保健福祉局福祉部障害福祉課「津久井やまゆり園で発生した事件について〕〈http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f535096/〉所収。

（3）「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」〔障害者差別解消法〕平成28年4月1日施行。

（4）拙稿「〈障害者〉への眼差し」荒武賢一朗他編『日本史学のフロンティア2』法政大学出版局、二〇一五年。

（5）疾病・疾患一般が障害とみられていたわけではなく、それは前近代も近現代も通時的に同様だろう。ただし、疾病・疾患に対し、偏見や差別の感情を伴う障害観念がいかに向けられるのかは重い課題である。パセドウ病（癲病）のように外見上で鮮明な差異性を感じさせる疾病などが念頭に浮かぶが、内疾患（臓器の病気）による健康変調なども、虚弱などによる労働生産に関われないなどの理由で、偏見・差別の対象としての〈障害〉認識にさらされる恐れが想定される。つまりそこには社会性が介在する。いずれにしても、疾病・疾患と障害認識の関係分析の重要性を喚起した上で、詳細については後考を期したいのを予め述べておく。

（6）「障害者自立支援法」（平成17年法律第123号）の「（定義）第四条」では、

この法律において「障害者」とは、身体障害者福祉法第四条に規定する身体障害者、知的障害者福祉法にいう知的障害者のうち十八歳以上である者及び精神保健及び精神障害者福祉に関する法律第五条に規定する精神障害者（知的障害者福祉法にいう知的障害者を除く。以下「精神障害者」という。）のうち十八歳以上である者をいう。

2　この法律において「障害児」とは、児童福祉法第四条第二項に規定する障害児及び精神障害者のうち十八歳未満である者をいう

とある。

（7）「身体障害者福祉法」（昭和24年法律第283号）の「（身体障害者）第四条」および別表、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」（昭和25年法律第123号）の「（定義）第五条」、「発達障害者支援法」（平成16年法律第167号）の「（定義）第二条」など。

（8）拙稿前掲参照。

（9）ことわざ研究会監修『俚言集覧自筆稿本版』第一巻、クレス出版、一九九二年、三頁（凡例）。

（10）村田了阿編輯、井上頼圀・近藤瓶城増補『増補俚言集覧』近藤出版部、一八九九～一九〇〇年。

（11）本稿で語彙採録対象にするのは活字本復刻版（上・中・下の三巻。名著出版、一九六五～六年）。

（12）ことわざ研究会監修『俚言集覧自筆稿本版』（全一一巻）クレス出版、一九九二年。

（13）『俚言集覧』の概要については、ことわざ研究会監修前掲本・第一巻「はじめに」を参照した。

（付記）

本稿は科学研究費助成金基盤研究（C）（一般）「近世日本の障害者と人間観に関する基礎的研究」（課題番号15K02865。二〇一五～一八年度、研究代表者　高野信治）による成果の一部である。

また、本稿での作表は、障害（者）認識の歴史的検証に関わる研究に資するとともに、障害者差別をはじめとする様々な社会的な偏見の解消を目的になしたものである。したがって、これに関連する目的以外での本表利用が許されないことを、作表者の責務として明記する。

項目	説明文	類型	認識	出典
あかがしら	〔倭訓栞・中〕生れつきて頭髪の赤き人なり	身体性	異常性	俚言・上8
あきしひ	俗にアキジリ目クラと云、明盲	身体性	異常性	俚言・上19
あき目くら	清盲と云又無筆を云	比喩性、身体性	異常性・無益性	俚言・上21
足なへ	〔新撰字鏡〕癖足、奈戸、足跛	身体性	異常性	俚言・上42
痿立ことを忘れす	痿ハアシナへ也	身体性	不完全性	俚言・上42
あつば	常陸にて唾をいふ	身体性	不完全性	俚言・上57
あはあ	但馬にて馬鹿をいふ、山城にてハあほといふ	知性	不完全性	俚言・上66
あはう	〔続無名抄〕〔世話字盡〕阿頰〔諺草〕阿房倶にあたらす	知性	不完全性	俚言・上66
＊アホウ	「おろかにあさましき」。秦ノ阿房ノ宮号に出たる詞也とぞ	知性	不完全性	俚言・上463
あはう払	〔甲陽軍鑑六〕方薬払といふ物に成けれハ云云〔同十四〕軽薄にして役に立ざる者を戯け者払に成けれ云云、今あほう払と云と同じかるべし、方薬とハ懲しめて追ひ払ふハそれが身の方薬の義にや	知性	無益性、害悪性	俚言・上66
あはうらしき	癡（おろか）なる形状をいふ、或ハあほらしきともいふ	知性、比喩性	無益性、害悪性	俚言・上66
あほ	癡人を云う、又アホウとも云	知性	不完全性	俚言・上81
あほう	安房、阿波と安房と倶にアハと呼ひて誤ち混する故に安房の方をば癡人のあほにいふなり	知性	不完全性	俚言・上82
あやし	怪も異も妖も奇も霊もあやし也、怪ハ変なること也、異ハ常とちかひたるを云、妖ハ人間なみでなきを云、奇ハめづらしき也、霊ハ生て働く様なことをいふ	比喩性	不完全性、異常性	俚言・上102
あんけら	愚なる人の形をいふ	知性、比喩性	不完全性	俚言・上95
あんごう	伊勢にて痴なるをいふ、あんだらにおなじ	知性	不完全性	俚言・上96

項目	説明文	類型	認識	出典
*アンタ	「おろかにあさましき」。京大坂にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性	俚言・上463
あんだち	あんけら、あんごう、痴をいふ	知性	不完全性	俚言・上97
*アンダラ	「おろかにあさましき」。京大坂にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性	俚言・上463
*アンポンタン	「あほ」	知性	不完全性	俚言・上81
あんぽんたん	〔和漢古語〕或云あんぽんたんハ西南海の蛮国の名にてもあるへし、六七十年ばかり以前漂船長崎に滞留す、其人言語不通愚痴なりしかば其比の流行語に人を軽侮してあんぽんたんといひしとも聞こゆと、巴旦国へ落しといふ俗語に似たり、巴旦国へ落たといふハばたんと落るにちかくあんぽんたんハあほうに近し	知性、比喩性	不完全性、侮蔑性	俚言・上99
石田検校	将某の名代	身体性	超越性	稿本・四106
石村検校	〔竹原物語　上〕	身体性	遊興性	稿本・四106
イタカ	〔倭訓栞〕イタカ、職人尽歌合に流し灌頂をして物もらふ者をいへり、今も都にハか、るものあり	身体性	不完全性	稿本・四41
*イタリネコ	「イタリ猫」。物類称呼。猫上総にて山ネコ、此ハ家にかハさる猫なり、関西東武ともにノラネコとよぶ、東国にてヌスビト（盗人）ネコと云、又イタリネコとも云	比喩性	人外性、非道性	稿本・四41
一盲衆盲を引	〔無門関〕云拚身能捨命一盲引衆盲	身体性	不完全性、超越性	俚言・上169
一夜検校	〔大子集〕けふハはや衣を著かへ香を焼付句たしなみ深き一夜検校。（一夜で成り上がった者の比喩〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	侮蔑性	俚言・上173
一寸法師	侏儒を云	身体性	不完全性	俚言・上195

項目	説明文	類型	認識	出典
犬神	巫蠱の術をする者也、四国にありといふ、蛇神狐惑の類也、〔醍醐随筆〕四国あたりに犬神といふ事あり、犬神をもちたる人たれにてもにくしとおもへハ件の犬神忽つきて身心悩乱して病をうけもしハ死すると云	精神性、身体性	異常性、人外性、怪奇性	俚言・上220
犬の屎癩のやうにいふ	人を口キタナクいふ也	身体性、比喩性	人外性、害悪性	俚言・上224
犬びと	吠声を発する隼人をいふ	身体性、比喩性	人外性、異常性	俚言・上226
犬目	涙のなき眼を云	身体性、比喩性	人外性、不完全性	俚言・上227
異類異形		身体性	異常性、人外性	稿本・四15
いれめ	目のしひたるもの仮に目を硝子などにて造り嵌るをいふなり	身体性	不完全性	俚言・上260
いろきちがひ	色情に因て発狂したる人をいふ	精神性	異常性、害悪性	俚言・上262
*うつけたる者	「あやめ」。うつけたる者を鼻毛、タイゲン、アヤメ、フンチウ、ハナダラ、アホウ、ホレモノ、などゝ仮初にも云べからず	知性、比喩性	不完全性、異常性、基準性	俚言・上104
*ウド	「結構ハ馬鹿の唐名」。ウドといふはタハケの唐名なり	知性	不完全性	俚言・上839
うまず女	〈ウマズメ〉石女	身体性	不完全性、無益性	俚言・上332
疫鬼	〔太平記廿三〕我已疫気に魂を被奪	精神性	怪奇性、不完全性	俚言・上359
老て再ひ児となる	〔弁慶物語他〕名木も老てハ愚にや返り花	知性、比喩性	不完全性	俚言・上381
老ぼれ	ホレは俗ニいふボケ也	知性、身体性	不完全性	俚言・上382
老を噛〈カム〉	〔鷹筑波〕オイヲカム歯も落ちぶれて見苦しやといふるに　高野聖を畏（ヲド）すむく犬（毛がふさふさの犬）	身体性	不完全性、醜怪性	俚言・上382
お釜	俗に臀をオ釜といふ、俗に衆道をオ釜といふ、〔本朝俚諺〕に本国の俗妻を呼てお釜と云（略）男色をお釜といふハいつ比より始りしや	精神性、比喩性		俚言・上385

項目	説明文	類型	認識	出典
唖	オシともオフシ又オシコロともいふ、唖児の義。〔新撰字鏡〕暗瘖	身体性	不完全性	俚言・上397
オシコロ	唖児の義にてロハ助辞	身体性	不完全性	俚言・上397
推つんぼう	〔和歌民のかまと〕	身体性	不完全性	俚言・上398
唖の一声	此ハ鴛鴦（ヲシドリ）の一声といふ諺を秀句に唖のかたにもいひて一の諺となれるなり	身体性、比喩性	不完全性	俚言・上399
唖の夢みるか如し	〔本朝俚諺〕。〔「おしの夢」思っていても、それをことばに出してはっきりと説明することのできないことをいった〔日本国語大辞典〕〕	身体性、比喩性	不完全性	俚言・上399
お大名	癩病の血脈ある者の家をいふ家筋で人が避よけると云喩なり	身体性、比喩性	忌避性	俚言・上404
鬼に瘤とらるゝ	〔俗諺集〕宇治拾遺物語に云るは（略）人の額に有ける瘤を質にとりてさりぬ（略）かの人の隣に瘤ある人この事を聞てうらやましく（略）瘤のうへにこぶをかさねてなく〳〵家に帰りけり〈富貴利達をうらやみて身にうまれ付ぬ幸を求るもの、戒〉	身体性、比喩性	基準性	俚言・上418－419
オフシ	於不志。唖、オシ。	身体性	不完全性	俚言・上397
親に似ぬ子ハ鬼子	愚案、諺の鬼子と云ハ不肖を詈（ののしり）ていへる也	知性	侮蔑性	俚言・上458
＊頑	「おろか」。一向に愚鈍なる	知性	不完全性	俚言・上463
おろ者	癡人をいふ	知性	不完全性	俚言・上464
＊駭	「おろか」。理解のできぬ	知性	不完全性	俚言・上463
下愚	かぐハ愚人の甚しきをいふ	知性	不完全性	俚言・上504
影の病	離魂病。影の煩とも云	精神性	異常性	俚言・上517
籠鼻	人鼻のきかざるを云	身体性	不完全性	俚言・上521
籠耳	〔毛吹草、吾吟我集〕みる事のめにはとまらずきくことの籠耳にしてみなわすれみす	知性	不完全性	俚言・上522

項目	説明文	類型	認識	出典
*カゴ耳	「ざる耳」。江戸にてカゴ耳と云、忘れ易きを云ふ	知性	不完全性、無益性	俚言・中234
瘡あたまを掻散したやう	かさハ皮膚に生する病の總名なり	身体性	嫌悪性	俚言・上522
かしこからず	〔シカタ咄〕一の十番、昔カシコウもなき者あり	知性	不完全性	俚言・上530
片ちんハ	ちんばといふに同し	身体性	不完全性	俚言・上551
片羽	〔古言梯〕残廃篤注不具人也、片羽の意	身体性	不完全性	俚言・上554
*缺者	「片羽」	身体性	不完全性	俚言・上554
*頑	「片羽」。カタハ、カタホ	身体性	不完全性	俚言・上554
片輪	愚按、不具の人をカタハと云は片羽の意と云り、輪に非ず（略）不具の人に片輪を用るハ非也、然れども俗の片輪に誤れるもあまねきことなれば別に挙けおくなり	身体性	不完全性	俚言・上559
かたは	見苦しい、ふつがうな、片羽也、不成人、不仁	身体性	不完全性、醜怪性	俚言・上559
偏びつこ		身体性	不完全性	俚言・上555
片目	一眼を云ふ又片目のがんち（頑痴）	身体性、知性	不完全性	俚言・上558
*片目のがんち	「片目」。片目のがんち（頑痴）	身体性、知性	不完全性	俚言・上558
癩〈カタヰ〉	人を詈て云、〔宇治拾遺〕心なしのカタヰ、所により乞食をカタヰと云、癩疾、〔和訓栞〕道路のかたはらに居て物を乞ハ傍居と云にや、今の俗は癩人をかくよべり	身体性、比喩性	異常性、侮蔑性	俚言・上559
かたゐ	〔風俗文選　二〕乞丐坂の石乞食をいふ、又癩病人をいふ、又人を罵りて呼ふ語、〔玉かつま　八〕ある人のいはく俗に癩病をかたゐといふは害大の字なり（略）このたぐひの説は打きくにはうへ〳〵しくきこゆれどもよくおもへばみなあたらぬことなり（略）癩病人をかたゐといふは乞児よりうつれることばなり、そはいとことなるがごとくなれど人をいやしめにくみてかたゐといへることあればそれよりいでたるなり	身体性	異常性、嫌悪性、侮蔑性	俚言・上559-560

項目	説明文	類型	認識	出典
癩石	奈良坂に石あり、腰かければゑた仲間に入れると云	身体性、比喩性		俚言・上568
癩畜生	人を卑〈イヤシメ〉云ふ辞なり、西洋人の人を卑しめ罵ることばにゴツテームス〈かたゐの意か〉ということあり、其意義いまだ詳ならされども懐ふに此等の言に類せるならん	身体性、比喩性	忌避性、嫌悪性	俚言・上568
癩と棒打	癩と棒チキリともいう〈癩〔かったい〕との争い、不釣り合いで無益な争い〉	身体性、比喩性	無益性	俚言・上568
癩まゆげ	カツタヰ眉毛とて男子の眉を細く作る事	身体性、比喩性		俚言・上568
癩村		身体性		俚言・上568
鐵聾	〈カナツンボ〉〔方言〕聾之甚者	身体性	不完全性	俚言・上579
鐘扣	〈カネタタキ〉乞食也。目ツカチ・提灯カネタ、キなど云	身体性	不完全性	俚言・上585
かはた	屠児をカハタと云所あり、皮をハク義なる歟、カタヰの転なる歟	身体性		俚言・上592
から女	石女也、ウマヅメと云	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・上667
眼一〈ガンチ〉	世人独眼人をカヌチといふは鍛工の祖神ニ天ノ目一箇ノ命の名あるをもて也といへり、されどガンチといへば眼一の音也ともいへり	身体性、比喩性	超越性	俚言・上642
かんねエ	長崎にて発達おそき小児のこと	重複性	不完全性	俚言・上645
きかじ	南部にて聾のこと	身体性	不完全性	俚言・上683
聞ず坐頭	能狂言	身体性	不完全性、遊興性	俚言・上683
気ちがひ	顛風	精神性	異常性	俚言・上705
きちかひなす	曼荼羅華このもの毒にあたりて発狂したるにハ茶をのませて妙なり	精神性	異常性	俚言・上705
気違日和	〈晴雨の定まらない不順な天候。気違い天気〔日本国語大辞典〕〉	精神性、比喩性	異常性	俚言・上705

項目	説明文	類型	認識	出典
気違も独ハくるハぬ	〔「きちがいも独（ひと）り狂（くる）わぬ」精神状態が尋常でない人でも、何かわけがなければひとりでに狂うようなことはない〔日本国語大辞典〕〕	精神性	異常性、忌避生	俚言・上705
気違よほうさいよ	〔俳諧節用集〕寛永の比泡斎踊といふはやりたりとなり、さて此の泡斎踊が気違のおとり狂ふに似たるよりいへるなるべし	精神性	異常性	俚言・上705
＊鬼畜	「恩を受て恩をしらぬハ鬼畜のごとし」	精神性	不完全性、非道性	俚言・上449
狐格子	盲人の〔当道記録〕に検校の家作に狐戸釣たる家云云、これハ格子ある蔀（しとみ）なるべし	身体性		俚言・上710
狐つき	狐魅	精神性	異常性、人外性	俚言・上711
気病	〔「きやみ」心配や気苦労から起こる病気。憂鬱症〔日本国語大辞典〕〕	精神性	異常性	俚言・上720
きやみ	気病にて思ひ労れて病になりしこと	精神性	異常性	俚言・上743
狂女	（きょうじょ）	精神性	異常性	俚言・上739
＊狂人くるへハ不狂人ともに云	「狂人走れハ不狂人も走る」。〔「きょうじん 走（はし）れば不狂人（ふきょうじん）も走（はし）る」人はとかく他人のしりについて行動しがちであることのたとえ。一匹の馬が狂えば千匹の馬が狂う。付和雷同〔日本国語大辞典〕〕	精神性、比喩性	異常性	俚言・上737
狂人走れハ不狂人も走る	〔世話尽、つれ〳〵草〕狂人の真似とて大路を走れハ則狂人也、悪人の真似とて人を殺さば悪人也	精神性、比喩性	異常性、害悪性	俚言・上737
＊愚	「おろか」	知性	無益性	俚言・上463
愚	おろかなること	知性	無益性	俚言・上760
＊クサイ者	「息ノ香ノ臭キハ主シラス」（自分の息の臭いことは、自身では気がつかない。自分の欠点は気づくのが難しいというたとえ〔日本国語大辞典〕）。クサイ者身シラス	身体性	異常性、基準性	稿本・四93
愚者千慮有一得	〔史記淮陰侯伝〕智者千慮必有一失、愚者千慮必一得	知性	基準性	俚言・上767

項目	説明文	類型	認識	出典
＊愚将	「犬死」。〔籾井家日記〕愚将の下に立つものハ皆犬死畜生神といふになりて一代の存念ハ水になり申事	知性、比喩性	害悪性	俚言・上223
＊愚人	「隠しての信ハ顕れての徳」。〔義貞記〕愚人の前なりとも人中に終に隔あらし泥智高貴ハいふもさらなり	知性、比喩性	基準性	俚言・上507
愚人なつのむし	とんで火にいる、いしをいたゞきて淵に入	知性、比喩性	侮蔑性	俚言・上767
＊グダマ	「おろかにあさましき」。奥州にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性、侮蔑性	俚言・上463
くるひ	狂を訓り又〔霊異記　中〕若託鬼邪、訓釈、託（クルヘル）	精神性	異常性	俚言・上795
くるひ死		精神性	異常性	俚言・上795
くるふ	狂ハ常とちがひたるなり、風ハ心のすわらぬこと	精神性	異常性	俚言・上795
黒坊	〔続無名抄　上〕因州鹿野といふ所に長七尺の男あり、崑崙国の者也、高麗陣の時捕はれて来りし、色油煙の墨の如し、常に崑崙坊といふ、幼きもの恐れおのゝきし（略）扨又本色の黒きものを黒坊と云俗語ハありしを崑崙奴の色黒きを俗語のクロンバウにいふなしゝが崑崙の字音の近きに因て崑崙坊の字をもくろんぼうと訓みなす事になりしなるべし、如今も長崎にては崑崙奴をクロンバウと云也	身体性	異常性、嫌悪性	俚言・上801－802
けいかん	鶏姦ハ男色に同し	精神性	異常性、人外性	俚言・上814
結構ハ馬鹿の唐名	〔為愚痴物語〕。〔「結構（けっこう）は阿房（あほう）の唐名（からな）」人がよすぎるのは、ばかと同じことだということ〔日本国語大辞典〕〕	知性、比喩性	侮蔑性	俚言・上839
けんつう	女の髪の少なきを俗におけんつうと云、江戸詞也	身体性	不完全性	俚言・上857
心から乞児〈カツタイ〉となる	〔大倭故事〕	身体性、知性	侮蔑性	俚言・中29
腰が二重〈フタヘ〉になる	〔夫木〕老らくの腰ふたへなる身なれとも卯杖をつきてわかなをぞつむ	身体性	不完全性、畏敬性	俚言・中39

項目	説明文	類型	認識	出典
御前〈ゼ〉	高貴の人を御前と云、又婦人を某御前と云、夫より転して盲女を盲御前、又省いて御前とばかり云	身体性	不完全性、畏敬性	俚言・中49
ごせ	目しひ女をごせといふハ盲御前といひしを略して御前〈ゴゼ〉とばかりいひしなるべし	身体性	不完全性、畏敬性	俚言・中49
五体不具	一頭両手両足に缺処あるをいふ	重複性	不完全性	俚言・中54
薦かぶり	非人、道路に伏せる物貰を云	重複性	不完全性	俚言・中106
ごろ	佐渡にて唖をいふ	身体性	不完全性	俚言・中117
妝慾児	〈さうかんじ〉つくりあほう	知性	詐称性	俚言・中137
座敷牢	狂人など座敷に閉ぢこめ置をいふ	精神性	異常性、害悪性、忌避性	俚言・中171
座頭	瞽者の官名也、今ハ盲人を見れば座頭といひ剃髪を見れば坊主と云也	身体性	不完全性	俚言・中183
＊座頭	「弾左衛門由緒書」	身体性	不完全性	俚言・中585
ざとう鯨	眼極めて細く盲に類す	身体性、比喩性		俚言・中183
座頭行儀	モテナシの饌菓などを包みもてかへるを云	身体性、比喩性	基準性	俚言・中183
座頭根性	〈疑い深くなりやすくひがみやすい性格〈日本国語大辞典〉〉	身体性、比喩性	嫌悪性	俚言・中183
座頭さへ京へ上る		身体性、比喩性	基準性	俚言・中183
座頭すまふ	〈座頭相撲〉江戸名物鑑〈寛延より明和頃まで〉座頭すまふ、のばす手ハなでるやうなる柳かな風潮	身体性、比喩性	遊興性	俚言・中183
座頭に沸湯をあびせるやう	〈「座頭に煮え湯を浴びせる」相手が知らないことにつけこんで、ひどい仕打ちをすること〈日本国語大辞典〉〉	身体性、比喩性	基準性	俚言・中184
座頭の足駄に物のはさまりたるやう	〈ニギハヒ草〉盲者の足駄に物のとまりたる類	身体性、比喩性		俚言・中184
座頭のあたまを戸板でたゝく		身体性、比喩性	侮蔑性	俚言・中184

項目	説明文	類型	認識	出典
座頭の垣のぞき		身体性、比喩性	無益性	俚言・中184
座頭のぐし	（剃髪しているので、櫛は不要であるところから、無用であること〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	無益性	俚言・中184
座頭の素麺くふやう	〔尤草子〕身くるしき物の品々座頭の素麺喰	身体性、比喩性	基準性	俚言・中184
座頭の杖を失ふやう	（「ざとうの杖を離れたよう」頼りにするものから遠のいたり、それをなくしたりするさま〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	不完全性、基準性	俚言・中184
座頭の中座敷	（座敷の中央に出てすわることをいったものか〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	基準性	俚言・中184
座頭のねいると月夜の明るハ人しらず	〔世話尽〕（座頭はまぶたをとじているから、いつ寝入ったのか人にはわからないことをいった。月夜も明るいので、いつ夜が明けたのかわからないうちに朝が来る〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性		俚言・中184
座頭の日高に着たやう	御前の日高に着くやう（旅をする座頭がまだ日の高いうちに宿に着いてしまい、なすこともなくいる状況から、遅れるはずのものが意外に早く目的地に着いたことをたとえていった。また、物事が早くすんだため、手持ち無沙汰であることをたとえていった〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	基準性	俚言・中184
座頭の昼寝もあて〳〵		身体性、比喩性		俚言・中184
座頭のよばひ杖をつく	〔江戸町名俳諧正保三年板〕座頭ハ杖につく竹屋町夜這にハ油町なる火をしめし今も大津絵に裸の座頭かけるハ此諺なりと信節云	身体性	侮蔑性	俚言・中184
座頭ハ牛七匹程すねる	〔世話尽〕（座頭が、概してひがみ心が強く、我意を張り通そうとすることをいった〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	嫌悪性、侮蔑性	俚言・中184
座頭を川中で剥く		身体性、比喩性	基準性	俚言・中184
猿児	或云西行伊勢の道中にて芻童の木にのほりたるを見てサルチゴと見るより木にぞのぼりけると口占しければ犬のやうなる法師来ればといへりとぞ	身体性	超越性、人外性	俚言・中231

項目	説明文	類型	認識	出典
ざる耳	備後あたりにて云ふ、江戸にてカゴ耳を云、忘れ易きを云ふ	知性	不完全性、無益性	俚言・中234
三人かたわ	能狂言	身体性	娯楽性	俚言・中211
三病疾	〔和訓栞〕ミツノヤマヒ、物に癩病の事をいへり、今三病の音を呼べる是也、大風麻（痲）風癘風の三ツをいふにや	身体性	異常性	俚言・中214–215
＊三病ヤミ	「癩」。癩疾	身体性	異常性、忌避性	俚言・上559
四度	（しど）瞽者の官	身体性		俚言・中290
＊死テの長者より生テのカツタイ	「死での長者より生ての貧人」	身体性	基準性	俚言・中331
十九日	馬鹿と云事、草書の十九日の字平仮名の十九日の如くかけハばかによめるに似たり	知性、比喩性	不完全性	俚言・中308
衆道	〔倭漢三才図会〕男色、俗云衆道、釈氏の語なり非道といふに同じ	精神性、身体性	非道性	俚言・中370
十の島	大坂にてアホウの事を十の島と云、平仮名のあほの字十のしまなれば也	知性、比喩性	不完全性	俚言・中312
＊侏儒	「伶人」（楽官、俳優、侏儒）。（背丈の低い人。こびと。一寸法師〔日本国語大辞典〕）	身体性	不完全性、遊興性	俚言・下681
出頭鼻をつく座頭目をつく		身体性、比喩性	無益性	俚言・中371
址溜子	蛇つかいの乞食なり	重複性	娯楽性	俚言・中391
白人	〈シレヒト〉〔斉東俗談〕所謂白癡シレモノ、万葉集愚人シレタルヒト、俗にシロウトはシレヒトの転するなり、愚案、白ハ素也素ハタ、也タ、ハ従也直也、白人はタ、ヒト也	知性		俚言・中400
白者〈シレモノ〉	〔今昔物語〕白痴〈シレモノ〉め	知性	不完全性、害悪性	俚言・中397
すぢ	癩病の種をスヂガ悪イと云	身体性	忌避性	俚言・中424
捨扶持	武家の代由緒ある老幼廃疾者なとに遣はす些少の禄米	重複性、比喩性	無益性	俚言・中428

項目	説明文	類型	認識	出典
すはら	子を産ざる婦人をいふ、素腹の義なるべし	身体性	無益性	俚言・中432
＊セイフ	「おろかにあさましき」。伊勢にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性、嫌悪性	俚言・上463
小鬼頭	（せうきとう）小びッちょめと罵ること、又小鬼頭児	身体性	異常性、侮蔑性	俚言・中456
蝉丸	（東斎随筆）逢坂の蝉丸式部卿敦実親王の雑色也（略）盲目の琵琶引ことハ始なり	身体性	畏敬性	俚言・中476
せんせいさん	佐渡にて盲人をいふ	身体性		俚言・中482
禅門	（物類称呼）モノモラヒ、肥ノ唐津又薩摩日向にてゼンモンと云	身体性	無益性	俚言・中489
道中乞食	（だうちゅうこじき）	重複性	無益性	俚言・中539
＊たけ高くおそろしげなる女	「悪魔あらひ」。婚礼の行列の中に悪魔あたひとてたけ高くおそろしげなる女の顔をすさましく色どり髪をみだして召つるゝ事今世上にはやる事也	身体性	超越性、招福性	俚言・上24
たハけ	（日本紀）淫タハケ戯と同訓義也（略）愚按、俗言に馬鹿といふに同し、戯楽を極むるハ即俗信の馬鹿を尽す也	知性	侮蔑性	俚言・中573-574
たふる	（倭名鈔）癲狂太布流、俗云毛乃久流比（気の狂い）、愚按、太布流ハ（略）倒の意なるべし、因て思ふに誑を太布良加寸と訓るも亦狂字の訓義より出たるか歟	精神性	異常性	俚言・中578
＊ダボウ	「おろかにあさましき」。信濃にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性	俚言・上463
太郎左衛門が出居の烏帽子	（醒睡笑）鞋〈ウツケ〉の條に七月風流を他郷にかくる太郎左衛門と云地下の年寄（略）鞋たる土民に此烏帽子風流に入るものぞそちに渡すといひ教即彼出居に置ぬ（略）いつれも時の笘にはあはぬをは太郎左衛門が出居の烏帽子とそいふ	知性	不完全性、無益性	俚言・中591
打老鼠	男色のこと	精神性	人外性	俚言・中591
＊ダラケ	「おろかにあさましき」。越中にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性	俚言・上463

項目	説明文	類型	認識	出典
＊ダラズ	「おろかにあさましき」。因幡にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性	俚言・上463
＊タワケ	「おろかにあさましき」。田分也といふ	知性	不完全性	俚言・上463
＊痴	「おろか」。小ざかしく（小賢しく）なき	知性	無益性	俚言・上463
＊畜生	「恩を受て恩をしらぬは鬼畜の如し」。恩をしらぬハ畜生とも云	精神性	人外性	俚言・上449
畜生そだて	子生れて産湯をつかハせず胎髪を剃す凡て畜生の如く無造作にしてそだつれば其児無病なりと云、是を畜生そだてと云	身体性	超越性	俚言・中605
地獄腹	女子ばかり産するを地獄腹と云	身体性	無益性、侮蔑性	俚言・中609
智者の敵とハなるとも愚者を友とせざれ	〔活版曽我物語他〕	知性	忌避性、害悪性	俚言・中611
癡人面前莫説夢	〔ちじんめんぜん夢を説くなかれ〕	知性	無益性	俚言・中610
痴性発作	あほうのことを思ふなり	知性	異常性、嫌悪性	俚言・中611
長吏	〈ちゃうり〉穢多を云	重複性		俚言・中629
ちんから	加賀金沢にてちんばをいふ	身体性	不完全性	俚言・中619
ちんば	跛（あしなえ）也、〔倭字通例解〕ナエタリ、弱注趿跛〈チンハ〉の字をあしなへとよむ、俗に短足をチンバと訓り	身体性	不完全性	俚言・中621
ちんぼう	小児の陰茎をいふ〔古今著聞集〕ちうぼうは六寸ばかり云々、大人のもいへり	身体性	不完全性	俚言・中621
づうてえ	身体の肥大なるを云、胴体の字音也、関東語	身体性	異常性	俚言・中644
月夜の道徳坊	〔大倭故事〕世の人の心にハたゝうつかりとしたるあはうなるやうの事を云。（「つきよ の 道徳坊（どうとくぼう・どうとくぼん）」うつかりしていて他人には阿呆（あほう）に見える人〔日本国語大辞典〕）	知性、比喩性	不完全性、基準性	俚言・中652
＊辻目暗	「弾左衛門由緒書」	身体性	不完全性	俚言・中585

項目	説明文	類型	認識	出典
土盲	〔案内者六月十九日座頭凉〕あがりたかる官なれとも官代なけれは土盲〈ツチメクラ〉〔室町時代以後、幕府が公認した盲人の団体である当道（とうどう）に加入していない盲人〔日本国語大辞典〕〕	身体性	不完全性	俚言・中663
つとのもの	夙の者、穢多の類、上方の国によりていふ	重複性		俚言・中667
つんぼ	〔倭漢三才図会〕聾、俗云豆牟保	身体性	不完全性	俚言・中679
聾に皷		身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・中679
＊ツンボウに鉄砲	「盲に抜刀」	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・下479
＊つんぼに鉄砲	「聾に皷」	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・中679
聾の立聴	〔なんの役にも立たないことをたとえていったもの〔日本国語大辞典〕〕	身体性	不完全性、無益性	俚言・中679
＊聾の早耳	「聾の立聴」。〔毛吹草〕聾の早耳（都合の悪いことや、悪口などはよく聞こえるということ。また聞こえないのに聞こえたふりをして早合点すること〔日本国語大辞典〕〕	身体性	不完全性、害悪性	俚言・中679
聾ほどもきかぬ		身体性、比喩性	不完全性、基準性	俚言・中679
＊でごのこ	「ちんから」。ちんば。飯田にてでごのこ	身体性	不完全性	俚言・中619
＊手長足長	「荒海の障子」。禁中にあり手長足長の島人をゑかきたる襖なり	身体性	超越性、畏敬性	俚言・上106
手長島	むかし手長き人の住む島国ありといふ	身体性	異常性	俚言・中706
手も足もない者のやう		身体性、比喩性	不完全性	俚言・中725
＊天上馬鹿	「天上」。元来と云へき所を天上と云、つまるところといふ意もあり、天上馬鹿天上何ほとのものなと云	知性	異常性	俚言・中717
＊侗	「おろか」。なにとも心得ぬ	知性	不完全性	俚言・上463
豆腐のやうなからだ	多病にて事に堪ず度々引籠する者を云	身体性	不完全性、無益性	俚言・中737

項目	説明文	類型	認識	出典
とうへんぼく	〔気のきかない人物やわからずやなどをののしっていう語。方言。ばか者。役に立たない者。うっかり者《とうへんぼお》島根県仁多郡・能義郡。《とうへろく》島根県邑智郡〔日本国語大辞典〕〕	知性	不完全性、侮蔑性	俚言・中737
*どう盲	「どう畜生」〔「どう」は接頭語。人を卑しめののしっていう語。感動詞的に用いる。こん畜生。この野郎〔日本国語大辞典〕〕	身体性、比喩性	嫌悪性、侮蔑性	俚言・中735
徳利子	〔倭漢三才図会〕無手人、按、無手人俗呼名缶児〈トクリコ〉、愚按、余が聞ところの俗言トクリコハ目鼻口耳なきものを云といへり	身体性、比喩性	不完全性	俚言・中748
どこ	加賀にて癩病をいふ	身体性	異常性	俚言・中749
としない	能登にて穢多をいふ	重複性		俚言・中755
年寄ハ犬も侮	〔北條時分諺留〕	重複性、比喩性	侮蔑性、不完全性	俚言・中756
泥鰌猫にとられたうぬが馬鹿でとられた	〔草苅笛賦〕	知性、比喩性	不完全性、基準性	俚言・中756
*ドス	「癩」。癩疾	身体性	異常性	俚言・上559
どす	ドスは癩也、上総また岩代の諺	身体性	異常性	俚言・中756
とちぐるふ	〔追善清十郎奴俳諧〕前学問を身にとつちめてする頃に〈といふ句に〉とちくるひてや遊ふ新発意	精神性、比喩性	異常性	俚言・中758
*とちんこ	「ちんから」。ちんば。七尾にてとちんことといふ	身体性	不完全性	俚言・中619
どもり	口吃也	身体性	異常性	俚言・中782
どもる	吃ハゆきつまる也、吶ハものいひの埒あかぬを云	身体性	異常性	俚言・中782
取のぼせる	乱心するを云	精神性	異常性	俚言・中792
鳥目	〔倭訓栞〕倭名抄雀盲をとりめとよめり、暮かたより見えぬ也	身体性	異常性	俚言・中793
*雀盲	「鳥目」。とりめ	身体性	異常性	俚言・中793

項目	説明文	類型	認識	出典
鳥山検校	楊弓の名人、安永年中の人、江戸両国川に楼船を泛（うか）へて船を横につなきて射たる人、百筋にて七十五すち中たりと	身体性	超越性	俚言・中793
とろい	遅鈍なるを云、甘き意也	知性	不完全性	俚言・中794
とろき人	〔色道大鑑　名目〕トロキ人戯たる者のいひかへり、うつけたハけといひたるより詞少ししやれたり、又当道初心にて取廻しもどかしく見ゆる人をもいふ、風流談曰いかにもまけやすきトロキ男を一疋捕へて念者と号して持もありと書り	知性	不完全性、侮蔑性	俚言・中794
索にも葛にもかゝらぬ	索（なは。縄）にも杓子にもかゝらぬとも云〔本朝俚諺〕此ハ老人なとの歩行思ふまゝならざるをば家内に索を張りそれに取つかせてあゆませ足たゝざればそれもかなハざる也	身体性	不完全性	俚言・中828
なりん坊	なりんぼハ見聞集に髭を剃たるものを昔男のなりひら（在原業平）とやいハん（略）曲〈マゲ〉ハ頂上にあかり眉毛ぬけて業平に似たりなといひて癩病人の見くるしき者を反対に業平といひしが転したる語なるべしといふ	身体性、比喩性	異常性、侮蔑性	俚言・中849
なれ	小倉にて癩病人をいふ、上方にてもいふ	身体性	異常性	俚言・中851
にエうとう	周防にて癩病をいふ	身体性	異常性	俚言・中852
二行子	ふたなり（「二形」〔古事類苑〕）	身体性	異常性	俚言・中852
二乗	法華経に二乗之人如聾如唖と見ゆ、声聞縁覚修行の人をいふ	身体性、比喩性	超越性	俚言・中860
人外	（にんがい）人道にあらさるを云、又穢多を云〔物類称呼〕薩摩にて人外といふ	重複性	人外性	俚言・中872
にやけ	男子の容貌の婦人の如くなるをにやけたりと云ふハ若気〈ニヤクケ〉の字音なり、本ハ男色の少人を若気と称せしより転りしなるへし（略）また昨日波今日及物語および醒睡笑等にハにやけを肛門の事とせり、何れも男色の事より転り来しものなり梅園日記稿	精神性、身体性	異常性	俚言・中875

項目	説明文	類型	認識	出典
によん	薩摩にて馬鹿の一名	知性	不完全性	俚言・中878
妊娠の時兎を食ハ缺唇〈ミツクチ〉の子を産		身体性	異常性、基準性	俚言・中873
ぬけ作左衛門	ヌケ作とばかりも云、ウツケタル者を云	知性	不完全性	俚言・下4
ぬける	俗にヌケルと云ふに二義あり、一ハ馬鹿の事、一ハ抜群の意也、又物を遺忘するを云	知性	不完全性	俚言・下4–5
ぬるい人	小倉にて愚者をいふ、出羽にてぐつ〳〵をいふ	知性	不完全性	俚言・下10
鼠も小六十	短矮の人も年齢ほどの事あるを云	知性、身体性	基準性、侮蔑性	俚言・下21
のげ	越後にて馬鹿をいふ	知性	不完全性	俚言・下34
の丶様	不爽利の人を小児に喩へてノ丶サマと云、又ノンノとも云〈痴愚で子どものような人をあざけっていう語〔日本国語大辞典〕〉	知性、比喩性	侮蔑性	俚言・下41
のろま	江戸和泉太夫芝居に野良松勘兵衛といふもの頭ひらく色青黒きいやしげなる人形をつかふこれをのろま人形と云、野良松の略語なり、又鎌斎左兵衛ハかしこき人形をつかひ相共に賢愚の体を狂言せしなり、それより鈍きものをのろまといへり	知性、身体性	不完全性、侮蔑性	俚言・下47
＊黴毒	「瘡あたまを掻散したやう」。〈かさハ〉専ら黴〈バイ〉毒にいふ	身体性	嫌悪性	俚言・上522
＊法師の櫛	「盲の鏡」	身体性、比喩性	無益性、侮蔑性	俚言・下479
歯生てうまる丶ハ鬼子	〔俗説弁〕俗間歯おひて生る丶児あれば鬼子なりとて殺す者ありといふ（略）長盛の後聡明の偉人となるものあらんに鬼子なりとてころせるハむけになさけなく残りおほき事也	知性、身体性	異常性、超越性、醜怪性	俚言・下56
破家	〈バカ〉。〔慶長本節用集〕破家〈バカ〉狼藉之義也、愚按、破家狼藉の義といふハ今の馬鹿者の事と聞ゆ	知性	不完全性、害悪性	俚言・下56
馬鹿	痴人を云、又凡て甚しき事をも馬鹿と云分鹿厲の義也	知性、精神性	不完全性、異常性	俚言・下56

項目	説明文	類型	認識	出典
＊馬鹿	「おろかにあさましき」。〔史記〕秦趙高カ故事ニもとづけり、拾遺、鹿をさして馬と云人有けれハかもをもおしとおもふ也けり	知性	不完全性	俚言・上463
＊馬鹿	「癖」。馬鹿のくせに	知性	不完全性、侮蔑性	俚言・上770
＊馬嫁	「破家」、「馬鹿」。〔慶長本節用集〕	知性		俚言・下56–57
＊馬鹿太郎	「太郎」。物の大いなるを太郎と云ふ（略）馬鹿太郎と云ふ諺あり、馬鹿の大なるを云ふ、其馬鹿を省いて太郎と計りも云ふ	知性	不完全性、異常性	俚言・中591
馬鹿と餅にハ強くあたれ	癡人を待に寛を以てすれば狎（なれ）て漸々凌くにいたる、餅を擣（つく）に強くなければねれあしきなりといへり（杵（きね）を強く打ちおろして餅を擣（つ）くように、ばかな者を扱う場合には、強硬な態度で接しなければどこまでもつけあがる〔日本国語大辞典〕）	知性、比喩性	不完全性、基準性	俚言・下58
馬鹿に傳る薬かない		知性	不完全性、害悪性	俚言・下58
馬鹿に兵法なし	〔世話尽〕	知性	不完全性	俚言・下58
馬鹿者におぢよ	馬鹿者ハよけて通せ	知性	不完全性、害悪性、忌避性	俚言・下59
＊馬鹿者におぢよ	「下手の射矢」	知性	忌避性	俚言・下277
ばすぬけ	豊前にて馬鹿をいふ	知性		俚言・下76
鉢扣	四條坊門油小路極楽寺より出つ	重複性		俚言・下87
八難	在地獄難、在畜生難、在餓鬼難、在長寿天難、在北洲難、盲聾痴難、世智弁聴難、生在佛前佛後難、と佛家にいへり	重複性	基準性	俚言・下87
はつしけ	奥州鹿角郡にて穢多をいふ、ほえしハ乞食をいふ	重複性		俚言・下93
はッち坊主	乞食を化子とも花子とも叫化子とも云（略）上方にて鉢ひらきと云ハ関東のハッチ坊主也	重複性		俚言・下94
＊鼻タラシ	「鼻の下か長い」。痴人	知性、身体性	異常性	俚言・下106

項目	説明文	類型	認識	出典
鼻の下か長い	痴人を云、鼻タラシとも云、鼻の下長けれハ命なかし	知性、身体性	異常性、超越性	俚言・下106
びっこ	跛也、又チンバと云	身体性	不完全性	俚言・下173
*ビッコ	「ちんば」。江戸にてビッコと云	身体性	不完全性	俚言・中621
非人	今俗に非人と云ハ乞丐の事也、抄（江談抄）に云へる非人は罪を免るされて検非違使庁の下部になしてつかハるゝ者の事なれは今云目あかしの類なり、此類を非人といへる也、俗言とハ小し異なり	重複性	人外性	俚言・下194
百の口がぬけた	癡人を云〔后山詩話〕世以痴為九百謂其精神不足也とあるを見れば一貫の中にて百不足するといふ事と見えたり。〔ひゃくの＝口（くち）［＝内（うち）］が抜（ぬ）ける〕銭さしの口がとれて、銭百文のうちの一部が抜けて不足があるの意から。一人前でない。愚かである。知恵が足りない。百が抜ける。百の口が足らぬ〔日本国語大辞典〕	知性、精神性	不完全性	俚言・下211
*白癩	（ひゃくらい）。「白鼠ハ福神の使者といふ事」〔好古日録〕俗説云白鼠ハ福神の使者なり（略）思ふに白鼠ハ人倫に比するに白癩のたぐひなるべし、もつとも妖物なり	身体性	招福性、怪奇性	俚言・中400
白癩になるとも	自誓の詞也	身体性	基準性、忌避性	俚言・下212
*ひんがら	「ちんから」。ちんば。大聖寺にてハひんがらといふ	身体性	不完全性	俚言・中619
無勘	〈ぶかん〉。盲人の勘の善からざるを無勘と云〔諺草〕歩艱人の行歩に堪さるをブカンと云は此字なり、あゆみなやむと読むべし	身体性、知性	不完全性、無益性	俚言・下228
*不具	「片羽」。〔古言梯〕残廃篤注不具人也、片羽の意	身体性	不完全性	俚言・上554
福介	頭の大なる人形、此土偶寛政年中製し出す	身体性、比喩性	異常性、招福性	俚言・下230
ふぐりなし	丈夫にあらずといふ事〔貞享節用集世話詞〕睾丸無	身体性、比喩性	異常性、不完全性	俚言・下233
不肖	不肖なから身不肖など云〔諺草〕中庸漢書武帝紀師古を引て云、今も身の人にしかざる事をいふ	身体性、知性	不完全性	俚言・下242
不揃	狂人を云	精神性	不完全性、異常性	俚言・下243

項目	説明文	類型	認識	出典
二形	〈フタナリ〉。〔倭漢三才図会〕半男女、俗云二形〔蛮語箋〕人痾ハルフマン	身体性	異常性、不完全性	俚言・下243
ふて癩	〈フテカタイ〉。〔盛衰記〕。ふてかつてい、筑前にて大変また大造	身体性、比喩性	異常性、忌避性	俚言・下250
文虚言せず	〈フミソラコトセズ〉。〔活版盛衰記〕癩人法師口説言、けふハよろづの人の口にのり目をさます皆道理ゆゑ、覚え文虚言〈フミソラコト〉せずとは是也	身体性	遊興性、基準性	俚言・下256
ふんちう	ウツケ者の事	知性		俚言・下259
下手の射矢	狐が下手のいる矢を恐るとも云、矢ツホ定まらぬゆゑにいづくへゆかんもはかりかたし、因ておそるゝとなり、馬鹿者におぢよと云諺の意なり	知性、比喩性	異常性、忌避性	俚言・下277
部屋子	江戸近在の百姓なとの内癩病の面体なと見くるしくて人前にも出さゞる者の別に部屋をつくりておくをヘヤゴといふといへり	身体性	異常性、嫌悪性、忌避性	俚言・下287
べらぼう	〔倭訓栞〕延宝の頃大坂に可〈ベラ〉坊と云異相の男あり〔寛文（一六六一～七三）末年から延宝（一六七三～八一）初年にかけて、見世物で評判をとった奇人。容貌きわめて醜く、全身真っ黒で、頭は鋭くとがり、眼は赤くて円く、あごは猿のようで、愚鈍なしぐさを見せて観客の笑いを誘ったという〔日本国語大辞典〕〔ばかな人。たわけ。ばか。あほう。多く、人をののしっていう語〔日本国語大辞典〕〕	身体性、知性	異常性、醜怪性、遊興性	俚言・下288
ほいたう	乞食をホイトと云	重複性		俚言・下290
ほいと	〔閑田次筆　四〕高野山にほとゝきすの帰り後れたるが木のふし穴なとにかゝまりゐてやゝさむくなるときは得動かず餌ばみももとよりえせぬを雀がつどひて餌をあたへ来るとしの夏に及ふまで養ふ、いと不思議なることにてこれを雀のほいとといふ、ほいとハ乞食のことにて雀のための食客といふことゝそしかるに其辺の山賊とも夫を探出て焼鳥なとにして食ふハ甚た悪むべし、其情雀にだもしかずといはんと、和田泰順医生の話なり	重複性、比喩性	基準性	俚言・下290

項目	説明文	類型	認識	出典
ほうさい	字未考、狂人を云気違ひよホウサイよと云諺有り、熱海の温泉にホウサイ湯と云あり	精神性	異常性	俚言・下292
ほえと	出羽にて乞食をいふ、又やッことも云	重複性		俚言・下297
ぽしし	越中にて穢多をいふ	重複性		俚言・下302
*凡鉄十九日	「十九日」。馬鹿と云事、大坂にて凡鉄十九日と云諺あり、凡鉄医師名	知性	不完全性	俚言・中308
盲官	〈マウカン〉。盲人の官、検校、勾当、座頭、衆分と次第す	身体性	不完全性、基準性	俚言・下335
*盲将	「良将の下に臆兵なく盲将の下に勇士なし」	身体性、比喩性	不完全性、害悪性	俚言・下674
*盲人のカン	「かん」。盲人のカンは堪字を用う	身体性、比喩性	超越性	俚言・上634
まだろす	くろんぼ	身体性	異常性	俚言・下356
身矓がッたい	〔他我身の上〕誓言にシシャレガツタイといへる昔から人の誓に山礪河帯とちかひしを末の世あしき病のカッタイにとりまきらはしたるにや	身体性、比喩性	基準性、嫌悪性	俚言・下396
みだれ	大坂詞、乞食をいふ	重複性		俚言・下403
無分別	智恵のなきことを云、馬鹿者をいふ	知性	不完全性	俚言・下460
名馬が蝦蟆になり美人がかつたいになる	〔不住同心物語〕さればある人の物語に侍をすつる事は名馬が蝦蟆（がまがえる）になり美人がかつたいになりたるよりも猶劣れりとそいへる	身体性、比喩性	異常性、不完全性	俚言・下474
目くら	目暗ハ盲也、瞽者をいふ常也、俗に目当もなくする事を盲何々と云	身体性、比喩性	不完全性、害悪性	俚言・下479
*目くらごぜ	「御前」。盲女	身体性	不完全性	俚言・中51
*盲御前〈メクラゴゼ〉	「盲鳴居」〈メクラシキヰ〉。（盲目の女性で、鼓を打ったり、三味線を弾いたりしながら唄をうたい、米銭などを乞うもの。ごぜ〔日本国語大辞典〕）	身体性	不完全性、遊興性	俚言・下479
盲さかし	〔授業編〕。（これという目あてもなくさがすこと。また、手さぐりでさがすこと〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・下479

項目	説明文	類型	認識	出典
盲鳴居	〈メクラシキヰ〉盲御前〈メクラゴゼ〉	身体性	不完全性	俚言・下479
盲にぐみくハする	〔世話尽〕盲のさぐりあて	身体性、比喩性	不完全性	俚言・下479
盲に抜刀	〔メクラニヌキミ〕〔森寺玉山書〕ツンボウに鉄砲、盲に抜刀。（反応がないことをたとえていった〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・下479
＊目クラに抜刀	「聾に皷」	身体性	不完全性、無益性	俚言・中679
盲に道をおそハる	（教えるべきものに、逆に教えられることをいった。また、適当しないものに物を尋ねることをたとえていった〔日本国語大辞典〕）	身体性	不完全性、超越性	俚言・下479
盲の鏡	（ふさわしくないこと、また、用をなさないことをたとえていった〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・下479
盲の牆のぞき	〔和漢古諺、毛吹草、本朝俚諺〕盲ノ壁ノゾキ〔犬子集〕花あれば誰も目クラガ垣ノゾキ。（何の役にも立たないこと、やってもむだなことをたとえていった〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・下479
＊盲ノ壁ノゾキ	「盲の牆のぞき」	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・下479
＊盲の器量吟味	「目くらの下り坂」	身体性、比喩性	不完全性、害悪性	俚言・下479
目くらの下り坂	盲の器量吟味（危険なことをたとえていった〔日本国語大辞典〕）	身体性、比喩性	不完全性、害悪性	俚言・下479
＊盲のさぐりあて	「盲にぐみくハする」	身体性、比喩性	不完全性	俚言・下479
＊盲ノ高ノゾキ	「盲の牆のぞき」	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・下479
盲の杖を失ふが如し		身体性、比喩性	不完全性	俚言・下479
＊瞽ノ窓ノゾキ	「盲の牆のぞき」	身体性、比喩性	不完全性、無益性	俚言・下479
盲蛇におぢず	〔野語述説他〕古歌に　踏あてばメクラモ蛇にオヅへきにしらねばやすき和歌の道かな	身体性、比喩性	侮蔑性、超越性	俚言・下480
目しひ	盲、瞽者をいふ	身体性	不完全性	俚言・下483

項目	説明文	類型	認識	出典
*目しひ女	「ごぜ」	身体性	不完全性	俚言・中49
*めつかち	「片目」、「鐘扣」（「目ツカチ」）	身体性	不完全性	俚言・上558
目なし山	〔古今六帖〕めなし山耳なし川に見ず聞ず有世ハ人ハうらみざらまし	身体性、比喩性	不完全性、基準性	俚言・下489
*眼もあかぬ大将	「犬死」。眼もあかぬ大将の所へ御使に参りかゝり犬死仕候と被申候	知性、比喩性	害悪性	俚言・上223
物狂	即狂人を云〔和名鈔〕癲狂又〔女夫草〕物狂椿也	精神性	異常性	俚言・下518
ものもらひ	〔物類称呼〕乞人江戸にて乞食といふ、法華経に清浄　食又乞食頭陀、行これは僧を云、長崎にてばん蔵又山ばん、中国及四国又奥羽より越後越中辺にてほいたうといふ〔略〕又筑紫にてゴウといふ、此国にてハこじきといふものは癩病人なり〔略〕今按に悲田寺は京都鴨川西の辺に有り、拾芥抄に云聖武天皇施薬非田の二寺を建て施薬院は大人の病を療し悲田寺は小児及乞食の病を治す、後終に乞食の寓と成よし見えたり、今におゐて癩病人の親族に捨らるゝもの般若に集り往来の人に物を乞ふ、続日本紀云武州入間郡の界に悲田所を置と見えたり、然らは京師のみに限らす所々に在し事にや、又聖徳太子悲田院を建て郭内に居らしむ魁首を長吏として郭外のものを非人とす、故に今も東国にて穢多を呼て長吏といふハかゝる遺風にや、或説に癩病人をかつたいといふは悲田院〈カツタイ〉と書て悲田院より起たる名也といふ、是は鑿説也、證治要訣に害大〈カツタイ〉と有り、又関西に物よしといふもの是たぐひ也とぞ、また乞食は乞食の事にて別也、混すべからず	身体性	異常性、忌避性	俚言・下522-523
物吉	物吉とは最吉の仮字也と云り、俗に癩を物ヨシと云（略）愚案、癩疾の者京都近郊に一戸を為て街路を物吉と呼て行乞す故に癩疾の徒を物吉と一名する也、物吉とは江次第の物吉にて祝辞なり、即コトホギ也、然るを世俗に癩疾の徒は大陰なりと云は取るに足らぬ妄説なり	身体性	異常性、招福性	俚言・下523

項目	説明文	類型	認識	出典
文盲	〔下学集〕文盲無智之義也、又蚊虻とも書くハ借字也〔ひそめ草序〕蚊のことく虻の如くなる人の為ならんかし	身体性、知性、比喩性	無益性、侮蔑性	俚言・下530
蚊虻	文盲の借字也	身体性、知性、比喩性	無益性、侮蔑性	俚言・下530
八坂本	平家物語八坂検校製したる活字板也	身体性	超越性、畏敬性	俚言・下552
八十の三歳児	漢書文帝紀曰、七八十翁嬉戯如小児これ異域同譚なり、老て再び児となりといふも同事なり	知性	不完全性	俚言・下558
＊山男	「山女」	身体性	異常性	俚言・下582
山女	陸羽の深山などにおのづから生したる山男山女といふありと塘雨が東遊記にあり	身体性	異常性	俚言・下582
よい〳〵病	此ハ近頃の鄙語也、廃疾を云	精神性	異常性	俚言・下616
四	〔倭訓栞〕ヨツ、備前に穢多を四ッと云、四足の義なるべし	身体性	人外性	俚言・下633
＊聾道心	「延享の比江戸の俚事」	身体性	不完全性、畏敬性	俚言・上371
老病	〔俗語録〕以老病辞	身体性	不完全性	俚言・下657
乱心	癲狂を云	精神性	異常性	俚言・下662
＊魯	「おろか」。気のはたらかぬ	知性	無益性、不完全性	俚言・上463
王の鼻	〔狂歌唱〕皷鼻〈サビ〉の病にて鼻の赤き人頬さきまで色づきけるを友だち皆王の鼻と名を付て喚侍る、神社の祭に神輿の前に掛る面の名を王の鼻といふ、きはめて鼻高く色赤き物なりさてかくぞよみける	身体性、比喩性	異常性、超越性	俚言・下701
わらくハず	人のウツケタルを云、シドノナキ者を云。〔「わらーくわず［＝くはず］わら不食」締まりがないこと。しどけないこと。また、その人〔日本国語大辞典〕〕	知性	不完全性、無益性	俚言・下726
ゐざり	躄を云	身体性	不完全性	俚言・下736
ゐざりばひ	小児の居ながら尻にてハフをいふ	身体性、比喩性	不完全性	俚言・下736

項目	説明文	類型	認識	出典
ゐた	〔物類称呼〕屠児	身体性	不完全性、人外性	俚言・下749
穢多皮剥御台所人	人からの悪き者をいふ	身体性	害悪性、基準性	俚言・下749
*ヲウカマシイ	「おろかにあさましき」。豊州にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性	俚言・上463
*ヲサゴ	「おろかにあさましき」。尾州にて、馬鹿、アホウ、タワケ	知性	不完全性	俚言・上463
鴛鴦の一声	鴛鴦〈ヲシ〉の一声（「唖〔オシ〕の一声」）。〔続狂言記　五、三人かたハ〕主是ハいかなこと唖がものいふた、去ながらヲシノ一声福貴の相と申す	身体性、比喩性	不完全性、招福性	俚言・下769
をと御前〈ゴゼ〉	ヲタフクの事〔狂言算勘智〕ヲタフク於部両出。〔おーたふく、阿多福〕おたふく面のような顔の女性。多く、醜い顔の女性をあざけっていう語〔日本国語大辞典〕〔おたふくーめん　阿多福面〕顔が丸く、ひたいが高く、鼻が低くてほおの豊かな女性の面。おかめ〔日本国語大辞典〕	身体性	醜怪性	俚言・下773
温湯	ぬるき者を云、又犬猫にいふ	知性、比喩性	不完全性、人外性	俚言・下782
をゆる	〔日本紀〕瘁瘼ヲユル	身体性	不完全性	俚言・下786